

議事録

第2回 学校運営協議会

日 付 : 令和6年(2024年)10月30日(水)

時 間 : 午後6時から7時

司 会 : 教頭(高橋)

報 告

- 1 第1回の議事内容について
- 2 中学生体験入学アンケート集計結果について

協 議

「今年度の教育活動について」

◆教務・生徒指導・進路指導の各部長及び縄文クラブ顧問から資料をもとに説明

◆質疑応答

○縄文クラブが中心となって取り組む「渡島フロンティア人材育成事業」の活動を知り感心した。例年「はこだて縄文まつり」の参加協力には感謝している。今年度は、体験活動に力を入れてまつりを開催したが、南茅部高校の体験ブースは多くの来場者で賑わっていた。令和10年度をもつての閉校は残念であるが、次年度も是非参加して、取組の成果を多くの方に見せてほしい。

○こども園との合同避難訓練について、園は危険で、高校は安全という想定なのか。また、高校に避難、移動する際のリスクはないか。

→想定は、園の施設、設備に被害や停電等があり、他への避難が必要で、その対応が高校で可能という前提で行った。本校は函館市の避難所に指定されており、発電機や照明器具、暖房器具等を備えている。なお、今回の実施に向け、地域防災の観点から南茅部支所と消防の南茅部支署に助言を要請している。また、リスクについては、訓練後の二者による反省会で、感染症対策の必要性があった。

○今年の3年生や過去の卒業生の進路で、漁業従事者はどれくらいいるのか。また、他の職種に就いた後で、漁業従事者として戻った卒業生の状況についてはどうか。

→高校卒業後すぐの従事について、現3年生は12名中男子1名、令和5年度は8名中男子1名、令和4年度はなし、令和3年度は9名中男子1名がである。なお、令和3年度以降の卒業生で、他の職種から漁業従事へ転職した例については、把握していない。

○真昆布の価値について学んでいることは理解した。進路指導の中では、職業としての昆漁等、漁業従事について指導しているか。

→進路指導で直接漁業従事に導く指導はしていない。ただし、「総合的な探究の時間」中の「南かやべ地域学」で、令和5年10月に大阪から、ミシュラン三つ星と一つ星の料理人さんと、昆布問屋さんの3名を招いて行った「真昆布フォーラム」の取組を通じ、真昆布の価値や昆布漁のやり甲斐を感じ、職安を通じた求人への応募が

ら昆布漁師（自営）へと進路変更した例が、当時の３年生で１名いる。このように、地域の資源や産業としての昆布漁等の漁業について「総合的な探究の時間」で学ぶ中で漁業従事の選択肢を考えられると思う。ただし、それ以上の漁業従事への強い促しは、進路指導では難しいと考える。

○大阪の昆布問屋さんが以前から毎年小学校を訪ね、昆布について学習してきていると承知しているが、各校種の学習や進路指導の中に漁業は取り入れているのか。

→小、中、高とも地域の学習などで行っている。

→本校では、６月から８月の昆布漁繁忙期に、始業を１時間遅くする「逆サマータイム」を設けることで、生徒が地元産業としての昆布漁の価値や意義を理解することを後押ししたり、また、体調管理の面でも配慮している。

○少人数の強みを生かした多様な教育活動が行われていることや、外部人材の積極的な活用やこども園との連携など、様々な人と関わる機会づくりをしていることに感心した。また、各種行事やカウンセリング等を通じ、生徒にとって安心感のある環境づくりが行われていることもわかった。

○函館市は人口減が続いており、特に就職や進学に伴って１５～２４歳の人口流出が多い状況だ。そんな中、圏域内に就職する生徒の割合が高いことはすばらしいことだ。可能性として、「南かやべ地域学」の地域の産業や自然、歴史や文化を深く理解する取組により、生徒が地域やこの圏域に魅力を感じていることが、その要因かもしれない。

○昆布漁について、生産量が日本一で、経済的にも潤っている状況下で、この地域から後継者が育たないことは問題である。食べていくことに困らなくなった現在の社会状況だが、少子高齢や人口減少に伴う漁業従事者減少は理解するが、学校教育に期待するだけでなく、市、組合、地域、現に従事している漁業者などが協力して、歯車が噛み合うような協議や取組をしていく必要がある。

事務連絡

◆次の開催予定：２月後半または３月中旬を予定。